

講座受講報告書

氏名 北谷 峰 二

会 派 名：ききょうクラブ

視 察 日：令和6年1月17日（水）～18日（木）

受 講 先：東京都千代田区有楽町

主 催 者：地方議員研究会

【地方公共交通特別講座について】

■ 講師：早稲田大学スマート社会技術融合研究機構客員教授 井原雄人

今回3講座を受講し、一番強く感じ得たことは、交通機関いわゆるバスなどの乗り物のみに注目していたが、これは大きな間違いであることに気づいた。

それは、地域公共交通は「まちづくり」の手段の一つであるということが、井原先生の講座で分かった。

通勤、通学、病院の通院そして買い物といった日常の移動手段と市外からの来街者がイベントや観光などといった非日常に活用することにより、「まちづくりの手段」としての価値が見いだせることを学びました。

その最たる例が、近くの中津川市である。

中津川市の考え方は、地域公共交通を定住促進事業の一つの手段として捉え、バス通学支援を市内の高校はもとより市外の高校に通う高校生、市外から市内高校に通う高校生にも通学支援を行うことにより、若い時から公共交通に慣れ親しんでもらい、そして定住に繋げたいという思いからとのこと。

また、この通学支援を行うことにより間接的に地元の民間バス事業者の支援ともなる。例えば、親が子供の送迎をした時の負担、とバス通学の場合の負担を比較すると、自家用車のガソリン代や親が送迎している時間（往復40分を2往復、月31時間とし、この時間を労働対価いわゆる給与として換算すると月25,000円となり、ガソリン代を含めて、年約372,000と算出され、バス通学では月額20,000円の定期代から当補助

制度を利用すると月額5000円の補助金があり、差し引き年約180,000円と算出でき、結果バス通学の方が割安であるとのこと。

また、この資料には無いが、環境にも良いのではと感じ得た。

「送迎される人は移動には困っていない」と言われている。それは、家族の送迎は奥さん（女性）の方が多く、朝は子供、亭主を駅まで送り、帰ると掃除洗濯、その後は、義母の病院への通院送迎。その後は、お昼の支度、子供の塾へ、その後は夕ご飯の支度、そして、ご主人の駅への迎えといった女性の一日でストレスが溜まるばかりというものであるとのこと。

これは、経済活動の機会（就労や社会活動）が奪われてしまっているとのことであり、経済的にも良くないと思う。

また、女性の負担増が知らないうちに増えているにも関わらず、当たり前と思ってしまっている。

現在、わが土岐市でもそうであるように、朝晩の通勤帰宅時間にはバス乗車率が高いが、昼間は、利用者が非常に少なく、民間バス会社が昼間、バス運転手を休ませてその時間は無給とする場合があるとのこと。

これは、益々運転手のなり手不足に陥り、バス会社そのものの存続が危ぶまれるのである。

この様な状況の中、土岐市では昨年私が一般質問での執行部からの答弁では、昼間の利用者が少ない時間帯には、バスを走らせず、それに代わる少人数で利用できるワンボックスカーやデマンドタクシーに変え、いわゆるハイブリット方式で検討したいと言われたことを思い出した。

この方法であれば、バス会社の存続も可能ではと考えられると思う。

井原先生は「タクシー会社だけは絶対につぶしてはならない。タクシーこそが地域公共交通の最後の砦」と言われおり、このことについても真剣に土岐市に訴えていかなければと今回のセミナーを受け感じ得た。